

五一広場東漢簡牘の公文書における竹簡の使用状況

飯田 祥子

はじめに

本稿は、長沙五一広場東漢簡牘⁽¹⁾の公文書において、「控えを書写する場合、竹簡を使用することが優勢であり、正本の簡との使い分けが存在した」ことを論じたい。そのために、五一簡の竹簡公文書は、臨湘県廷を発信者とするものが多くを占め、県廷を受信者とするものを主としないことを示す。なぜならば、五一簡は臨湘県廷の廃棄文書とされるため、県廷を発信者とする文書は、発信者と廃棄地が一致することになり、発信された正本ではなく、発信者のもとにとどめられた控えである可能性が高いからである。

公文書に使用された簡牘の形状は、正本であるか否かと関係する。角谷常子⁽²⁾によれば居延漢簡では、正本には「兩行」とよばれる二行書き用木簡が、「草稿」には「札」とよばれる一行書きの木簡が多く用いられた。⁽³⁾兩行も札も紐をかけて編綴し、冊書に構成して用いたという点では共通するが、書写する行数によって使い分けが存在したので

ある。

これは漢代の公文書に普遍的な現象だろうか。中国古代公文書の研究は、長く敦煌・居延など西北地域出土のいわゆる西北漢簡を主たる対象になされてきたが、地域的な特性に注意が必要である。書写材料として安定供給された素材に竹があるが、西北地域には自生しない。かつて、木と竹の使い分けがどのようになされていたかは、そうした植生上の制約が大きい西北漢簡から推測せざるを得なかった。⁽⁴⁾ 対して、近年、新発見・新公開がめざましい湖南省出土簡は、木と竹を併用し使い分けることが可能な環境で作製された。加えて長沙では前漢武帝期の走馬樓西漢簡牘から三国時代の走馬樓吳簡まで、長期間にわたる官府の廃棄文書が出土している。公文書の書写材料として、木と竹はどう使い分けられ、使い分けはどう変遷したのか。五一簡は後漢中期の資料群であり、書写材料としての紙が出現した時期、すなわち竹木を中心に書写した時代の最終段階にあたる。⁽⁵⁾ 竹簡がどう使用されたかを把握することは、五一簡の読解に不可欠であるのみならず、紙の出現後の文書を理解する上でも有意義な視点を提供するのではないか。

一、五一簡の概要

五一簡は、後漢和帝から安帝期の長沙郡臨湘県廷の廃棄文書とされる。⁽⁶⁾ 総数は六八六二点（『老』前言）で、二〇二四年四月現在、公開数は約三七〇〇点、そのうち竹簡は二五〇〇点以上である。⁽⁷⁾ 五一簡は木両行が注目されてきたが、⁽⁸⁾ 点数でいえば竹簡が圧倒的に多い。

しかしながら、竹簡の検討は十分でなく、断簡に対する綴合検討も少ない⁽⁹⁾。原因は竹簡の残存状態の悪さにあるだろう。長さ一〇センチ以下の簡が半数以上を占め、二〇センチ以上のものは一割に満たない⁽¹⁰⁾。一尺二三センチで成形したとすれば、原形をとどめる簡はわずかである。

「簡報」によれば、竹簡は「長さ二二～二三・五センチ、幅〇・五～一・六センチ、厚さ〇・〇五～〇・一二センチ」である。二行書きの木簡である木両行の「長さ二二～二三・五センチ、幅二・五～三・五センチ、厚さ〇・三～〇・六センチ」と比較すれば、竹簡は薄い⁽¹¹⁾。地下の環境や発掘後の処理により、作製・使用時の形状ではないことを想定せねばならないが、そもそも竹簡は薄く、もろかった可能性はある。

五一簡は、外部との情報伝達や、内部での意思決定にかかわる文書を多く含む一方で、簿籍は少なく、刻歯（刻み。照合に用いる）をもつ割り符形式の証明用の文書は確認できない。そのため限定された分野・部局の保管文書であった可能性が高い⁽¹³⁾。

本稿の検討は情報伝達にかかわる狭義の文書、公文書に限る⁽¹⁴⁾。公文書は発信者と受信者の関係により文言が定まる。五一簡についても一定の整理検討があり、断片でも特徴的な語を含むものは、発信者を絞り込むことが可能である。

統属関係からすれば、臨湘県廷が保管する可能性のある公文書は、

上行文書…臨湘県属吏発信—臨湘県廷受信文書の正本

臨湘県廷発信—長沙太守府受信文書の控え

平行文書…他県県廷発信—臨湘県廷受信文書の正本

臨湘県廷発信—他県県廷受信文書の控え

下行文書…長沙太守府発信—臨湘県廷受信文書の正本

臨湘県廷発信—臨湘県属吏受信文書の控え

である。⁽¹⁶⁾ 加えて長沙太守の属僚たる郡属吏とのやりとりがみられるので、

郡属吏発信—臨湘県廷受信文書の正本

臨湘県廷発信—郡属吏受信文書控え

が存在する。⁽¹⁷⁾ ただし何らかの事情によりそれ以外の事例、いわゆる異処簡が発生することは想定せねばならない。⁽¹⁸⁾

これらを考慮したうえで、竹簡に臨湘県廷を発信者とする文書、つまり県令（長官）・県丞（次官）の名義の文書が特に多く存在するのであれば、「はじめに」で提示したように「控えを書写する場合、竹簡を使用することが優勢であり、正本用の簡との使い分けが存在した」ということができるだろう。

二、上行文書の発信者名の整理

前述のとおり、五一簡の竹簡は残存状態が悪くほとんどが残簡であるため、一部分しか釈読しえないことが多い。そのため、以下では本両行の公文書の構成要素・文言を参照して、竹簡の発信者名を検討してゆく。

本両行を使用した公文書で、もつとも多く確認できるのは「敢言之」の文言をもつ上行文書であり、構成要素は

以下である。⁽¹⁹⁾

- ① 受信・開封記録欄（冒頭簡B面）…「○印」「○月・日、郵人以来」「史 白開」
 - ② 本文（冒頭簡A面→末尾簡）…「元号年・月・干支朔・数字日・干支、官職・名（叩頭死罪）敢言之。」（背景状況説明）名・叩頭死罪死罪）「報告用件」、名（惶恐叩頭死罪死罪）敢言之」
 - ③ 標題（標題簡）…「官職（名）言「報告用件概略」書」（月・数字日・開／発）
- これを参考に、竹簡の「敢言之」文書の発信者を整理する。

（1）本文冒頭簡「官職・名（叩頭死罪）敢言之」

構成要素②本文の冒頭簡A面の書き出し「敢言之」の前には、官職名を冠し発信者の諱を記す。「敢言之」の文書やその断片をみてみよう。『肆』一二六四は、完形で正背両面が公開されている。

延平元年四月戊申朔廿三日 庚午臨湘令君守丞護叩 頭死罪敢言之（A）

據蘇受令史彭式兼史李順助史黃條（B）（竹簡『肆』一二六四226*13）

図版からは、不鮮明だが謹直な筆跡が確認できる。木両行の「敢言之」文書と同じく発信年月日からはじまり、日付は「干支朔・数字日・干支」で表記される。発信者は「臨湘令君」と「守丞護」である。発信者の諱を「君」に替えることは、西北漢簡の「草稿」にみられ、起草者が上司の名を書くことを避けたとされる。⁽²⁰⁾「守丞護」は「君教本牘」（「壹」三〇七等）でも確認でき、とりわけ『選』一二五（③305）はこの翌日にあたる「廿四日」の日付がみえる

ことから、同一人物であろう。B面に掾・令史・兼史・助史四名の姓名を記す。

次の簡も「敢言之」の文言が確認でき、発信者に「令君」を含む例である。

永□十□年七月……令君丞□ 叩頭死罪敢□ (A)

……掾優史竟□ (B) (竹簡『弑』五五・19.5*14)

□ 湘令君丞優頓首 死罪敢言之 □ (A)

□ …… 兼掾黃重兼令史陳□□□ (B) (竹簡『伍』一八七〇12.8*14)

『伍』一八七〇の「丞優」は「君教木牘」『壹』三三・一等にもみえる。

一方、県令の諱「丹」が記される簡もあるが、臨湘県令に殷丹という人物がある⁽²¹⁾。

永初三年四月庚申朔一日 庚申臨湘令丹守丞 叩頭死罪敢言之 (A)

兼掾蘇受令史舒俊兼史王賢 (B)

(竹簡『伍』一・7・11.8*1.3 + 『伍』11・11.11.8.59*1.3)⁽²²⁾

永初元年十一月己巳朔廿五日 癸巳臨湘令丹丞 叩頭死罪敢言之 (A)

兼掾董普令史連陽 (B) (竹簡『捌』11・11.15.62.5*1.4)

□ 臨湘令丹守丞皓敢言之直符□ (A)

□ 掾祝商獄□ (B) (竹簡『陸』二五・八二・2*1.2)

「守丞皓」は「臨湘令丹」とともに永初三年の文書(『壹』三九・二等)にみえる。丞・守丞の名が別筆や空白のものが

あるが、このような例も西北漢簡の「草稿」にみられる。⁽²³⁾

次の簡は令の諱が空白で、丞の諱は別筆である。また発信年がみえないが、図版によれば簡頭に欠損がないので、発信年からはじまる別の文書の後に編綴されていたと考えられる。別の文書の中継転送する際に用いた文書であろう。

四月□日□□臨湘令 丞優叩頭死罪□□(竹簡『柒』一九六〇(1)154*16)

次は「敢言之」の対象が「中部督郵」である。

九月廿五日庚戌臨湘令丹 丞綴叩頭死罪敢言之中部督郵(竹簡『伍』一八〇八27*14)

四八頁に後掲する本兩行「敢言之」文書『貳』六八二を参照すれば、「掾某掾」を平出した督郵治所宛ての文書であるとわかる。発信者は「臨湘令丹」と「丞顯」であり、「丞顯」はほかに「竹簡白文書」『貳』七〇五等にサインしている。

(2) 「名・叩頭」を含む残簡

五一簡の「敢言之」文書では、三七頁に示したように構成要素②本文の中で引用終わり等の区切りを示す「叩頭死罪」の前や、および書き止めの「叩頭死罪死罪」敢言之」の前でも発信者の名を明示する。それゆえ書き止めや区切り文言を含む簡は残簡であっても発信者を推定することができる。

次の五点は発信者である県令の諱を「君」に替える。

□十五日君(?) 惶恐叩頭叩 (竹簡『叁』八四五・8.1.1)

□□日君惶恐 叩頭□ (竹簡『肆』一一四・19.8*1.4)

□謹寫言君惶恐 叩頭叩頭死罪 (竹簡『陸』一一一七八・59.1.3+一一一八〇3.8*1.4)

君叩頭叩頭死罪 死罪奉得記輒□ (竹簡『捌』一一一六七・14.3*1.5)

□君 惶恐叩頭叩頭死 罪死罪敢言之 (竹簡『捌』一一三三六・117.2*1.2)

以下の発信者は「丹」とあり、前述した県令殷丹と同名である。ただし同名異人の可能性は否定できない。⁽²⁵⁾

□□得正處言丹 叩頭叩頭死罪死罪 (竹簡『叁』八二二・14.4*1.3)

□考實□□正 處言丹(?) 叩頭叩□ (竹簡『叁』八五・10.4*1.4)

□連(?) 陽□逐 捕知必得考實正處 復言丹惶恐叩頭叩頭 (竹簡『肆』一一三四九・19.6*1.5)

□副正 處言丹(?) 叩頭叩頭死 罪死罪□ (竹簡『伍』一七三・13.0*1.4)

□□言丹叩頭叩頭□ (竹簡『柒』一一一〇五・17.7*1.3)

□□丹叩頭叩頭死罪□ (竹簡『捌』一一六〇四・6.3*1.5)

県丞と同名の人名が確認できるものは二点ある。

謁□以……考實姦詐正處 言宮叩頭叩頭死罪死罪奉 (竹簡『叁』一〇一一・12.2*1.2)

□……□□梁叩頭死 (竹簡『伍』一七三・四・12.4*1.3)

「宮」は「守丞宮」として木両行「敢言之」文書『貳』六八二(四八頁に後掲)、および「竹簡白文書」『叁』一一六

四に、「梁」は「守丞梁」として「竹簡白文書」『伍』一八一六にみえる。

ただし「叩頭死罪」の文言は、木牘を使用した「叩頭死罪白」文書でも用いる。⁽²⁶⁾ そのため、竹簡の場合も、「叩頭死罪」が「敢言之」へ続くことが確認できないものは、「叩頭死罪白」文書である可能性⁽²⁷⁾がある。また後に第三章でもみるように梟同士の平行文書では「叩頭移」の文言を用いる。⁽²⁸⁾ すなわち、「叩頭」に続く文言としては、「死罪敢言之」「死罪白」「移」の三つの可能性がある。

臨湘令丹丞顯叩頭□(竹簡『貳』七五九70*13)

□□辰臨湘令丹丞叩□(竹簡『捌』三五一五22*12+三五一九五*12)

□君丞政(?) 叩頭□(A)

□□□□(B) (竹簡『捌』三五七二14*14)

これらは「叩頭」のみが釈読され、続く文言が「死罪敢言之」「死罪白」「移」のどれか判断できない。とはいえ梟令・県丞の名義であり、県廷を発信者とする文書であると判断できる。

(3) 「官職(名)言書」簡

「臨湘言」から始まる竹簡が一点存在する。

臨湘言男子蔡陽光文燔燒男□(竹簡『貳』五五九106*12)

臨湘言考實男子□□□盜□□□(竹簡『貳』七六六107*14)

五一広場東漢簡牘の公文書における竹簡の使用状況

飯田

二七五

臨湘言亭長□香 遂人髡鉗罪正法□□ (竹簡『叁』一〇四||142*1.3)

臨湘言考實男子□□□ (竹簡『肆』1111164*0.8 + 『肆』1110565*0.8)⁽²⁹⁾

臨湘言實核效功亭長王純弟 眞與蔣隆□ (竹簡『肆』一四||131*1.5)

臨湘言必得殺一家二人賊張 □□□□□書 (竹簡『肆』一四五||22.3*1.4)

臨湘言逐捕傷人者吳周 未能得假期解書□ (竹簡『肆』一四八||141*1.4)

臨湘言逐捕盜發胡叔賊□ □者吳請黨□番番番□ 及□□□□□□ (竹簡『肆』一五||20.5*1.4)

臨湘言界□蒼傷□□□ (竹簡『肆』一六一558*1.2)

臨湘言考故御□ (竹簡『伍』一九一四33*1.3)

臨湘言考實由□□ (竹簡『伍』11011157*1.4)

臨湘言女子□華 (?) 言男子 鄧□□□□ (竹簡『陸』114||1089*1.4)

臨湘言逐捕考實□□ (竹簡『捌』11115668*1.4)

●臨湘言死罪大男楊 堅劾狀舉塞 □ (竹簡『捌』1155140*1.0 + 1151114*1.4)

図版ではいずれも上端が確認でき、上端から詰めて書写する。ほぼ一尺完形の長さを保つ『肆』一四五二では、上端から詰め「書」で結び、「書」の下は空白である。

上端部は確認できないが、次の二点も「書」で結び、その下は空白である。

□□官布者死下梁 連未竟假期解書 □ (竹簡『肆』一四七八118*1.3)

□□□解書 □□(竹簡『肆』一六一・一六七〇*12)

「臨湘言」書」という文言と、上端から詰め、下方を空白とする字配りが共通していることから、以上の一六点は一定の書式に従い書写されたと考えられる。⁽³⁰⁾

これと共通する特徴をもつ木両行がある。「敢言之」文書の③標題簡である。

廣亭長暉言傳任將殺人賊由併

小盜由肉等妻歸部考實解書 六月廿九日開(木両行『弑』六五四236*31)

このように、某官の某が用件を「言」(報告)する「書」と記される⁽³¹⁾。一方、発信者の諱を示さない例もあるが、やはり用件を「言」する「書」とある。⁽³²⁾

桑 鄉 言

詔書謹到書(木両行『老』三九八235*22)

先ほどみた竹簡「臨湘言」書」は、記載内容も木両行「敢言之」文書標題簡と共通する。例えば「臨湘言」から「書」までの全文が釈読されている『肆』一四八二(四二頁に前掲)は、「傷人者吳周」を「逐捕」したが「未だ得る能わず」という状況ゆえ、「期を假るの解」を臨湘県が「言」した「書」とある。これは木両行を使用した、

兼左部賊捕掾馮言逐捕殺

人賊黃康未能得假期解書 十二月廿八日開(木両行『弑』五三〇231*29)

と語彙が一致し、固有名詞のみ異なる。他の例でも「考實」「實核」「逐捕」等、取り調べや身柄確保を意味する語

五一 広場東漢簡牘の公文書における竹簡の使用状況

飯田

二七七

がみえ、事件の報告書の見出しにふさわしく、その点でも木両行の標題簡と共通する。

以上により、「臨湘言」書」の竹簡は、木両行の③標題簡「官職（名）言」書」と共通する書式で書写され、臨湘県廷を発信者とする「敢言之」文書の標題簡と考えられる。

では竹簡の標題簡に、「臨湘」以外を「言」の主語とするものはあるだろうか。「某郷」が主語となる「言」書」は確認できない。以下の各簡では「亭長某」が「言」の主語となっている可能性がある。

□□陵亭長 安言捕得殺王□□（竹簡『弑』六八七・二・七・一・一）

□長曠 言男子……亡□（竹簡『弑』七九五・二・一・三）

□□亭長种言賊曹□□（竹簡『伍』一・一〇九四・七・九・一・一）

□亭長尊言 男子□□□□（竹簡『陸』一・一三七九・六・一・五）

□亭長順言武陵 □□□□（竹簡『陸』一・一四一〇・七・一・三）

これらは四三頁に前掲の『弑』六五四のように、亭長が発信者で県廷が受信した「敢言之」文書の標題簡である可能性は否定できない。ただいづれも残簡であり、「書」字の有無や字配りの特徴を共有するか否かを確認できないため、文書本文の一部である可能性もある。⁽³³⁾

一方で、木両行の標題簡全五五点中、「臨湘言」は一例も確認できない。臨湘県廷を発信者とする「敢言之」文書標題簡は竹簡に偏る。

(4) 有書記者名簡

五一簡の竹簡には、木両行にあまりみえない記載が散見される。完形の『肆』一二六四(三七頁に前掲)を再掲する。

延平元年四月戊申朔廿三日 庚午臨湘令君守丞護叩 頭死罪敢言之 (A)

掾蘇受令史彭式兼史李順助史黃條 (B)

B面の官名と姓名は、長官・次官の名で発信する文書において、担当の書記者名を記載した、いわゆる副署名⁽³⁴⁾である。木両行を使用した「敢言之」文書でこれが見えるのは、四七・四八頁に後掲する『弐』四三七と『弐』六八二の二点のみである。⁽³⁵⁾

一方、竹簡ではこの例は少なくない。本稿で既出の簡では、「掾優史竟 \square 」(『弐』五五一B)、「兼掾蘇受令史舒俊兼史王賢」(『伍』一七三八B + 『伍』一二三八B)、「兼掾黃重兼令史陳 $\square\square\square$ 」(『伍』一八七〇B)、「掾祝商獄 \square 」(『陸』二五八八B)、「兼掾董普令史連陽」(『捌』三二五六B)とあった。その他の「敢言之」文書の断片に以下がある。

\square 敢言之 (A)

\square 史連陽兼史這脩 (B) (竹簡『伍』110六九44*13)

\square 死罪敢言之 (A)

\square 史彭均王茂助史張常伍璘 (B) (竹簡『伍』110九154*13)

\square 罪(?) 敢(?) 言(?) 之(?) (A)

五一広場東漢簡牘の公文書における竹簡の使用状況

飯田

二七九

- ☐ ☐ ☐ 兼(?) 史殷賢齊(?) ☐ (B) (竹簡『陸』11138750*13)
☐ 言之 ☐ (A)
☐ 令史這脩吳☐ (B) (竹簡『陸』1140532*1.1)
☐ 死罪敢言之 (A)
☐ 徂令史蒼助史順 (B) (竹簡『柒』1171951*1.1)
☐ 叩頭死罪敢言之☐ (A)
☐ ☐ 掾殷材令史尹副兼☐ (B) (竹簡『柒』11711449*1.3)
☐ 死罪敢言之 (A)
☐ 侯竟兼令史王祉 (B) (竹簡『柒』1176153*1.6)
☐ 罪敢言之 (A)
☐ 史彭遷兼史這脩 (B) (竹簡『柒』1183859*1.3)
☐ ☐ 叩頭叩 頭死罪敢言之 (A)
☐ 掾徐(?) 高令史這脩助史☐ 穆 (B) (竹簡『柒』11939123*1.4)
☐ 頭 死罪敢言之☐ (A)
☐ 掾張雄令史☐ (B) (竹簡『柒』11104158*1.0)
☐ 死罪敢言之☐ (A)

□張雄兼令史連□(B)(竹簡『捌』三五八九4*13)

□叩頭死罪敢言之(A)

□□史鄧脩(B)(竹簡『捌』三六一八54*13)

□敢言之(A)

□兼史王杜彭式(B)(竹簡『捌』三六一九39*15)

□□敢言之(A)

□□史彭式王杜(B)(竹簡『捌』三六二九47*15)

これらは書記者名がある以上、属吏を発信者とする文書ではない。それゆえ県廷を発信者とする可能性が高い。『弐』五五一(三八頁に前掲)と『柒』二七一九(前頁)を除き、書記者名を「姓名」で書くことに注目しておこう。

(5) 県令・県丞「敢言之」木両行

これまで竹簡のうち、上行文書の特徴をもつものをみ、それが県廷を発信者とする可能性が高いことをのべてきたが、一方で木両行の「敢言之」文書にも県令・県丞を発信者とする簡が二点ある。

永初三年正月壬辰朔 日 臨湘令丹守丞皓 敢言之謹移耐罪

大男張雄舒俊朱循 樂竟熊趙舜狀一編 敢言之(A)

掾祝商獄助史黃護(B)(木両行『弐』四三七235*33)

六月十七日辛亥臨湘令 守丞宮叩頭死罪敢言 之中部督郵

掾費掾治所謹寫言宮惶 恐叩頭叩頭死罪死罪敢 言之兼掾陳暉兼令史陳昭王賢 (A)

臨湘丞印

六月 日 郵人以來 待史 白開 (B) (木両行『弐』六八一二三二三三)

『弐』四三七は県令・守丞が発信者である。しかし「朔」の後の日付と干支が入らず、守丞の「皓」は別筆であるため、実際に発信されたものではないだろう。『弐』六八二は守丞が発信者であり、宛先は「中部督郵掾費掾治所」である。督郵は郡属吏で県を監察し、管轄地域内を移動してオフィスを置くので、受信文書を県廷内で保管する可能性がある。⁽³⁶⁾『弐』六八二のA面第二行「寫言宮惶」は字間がせまく、「宮」は後から補い記入したようにもみえる。あるいは書き損じを修正したうえで、結局発信を取りやめたものであろうか。

この他に、「行丞事」が発した「敢言之」文書の冒頭簡(「壹」一一三、「伍」一八五四+三〇八五+一〇九八)と標題簡(『弐』五七九、『柒』二八七三)が計四点確認できるが、これらの簡は司法を担当する獄に所属する獄史や証言の文書である爰書とかかわり、獄から県廷に宛て「行丞事」か「行獄丞事」が発したと考えられる。確認できるかぎり、この六点を除くこのりの木両行「敢言之」文書は、臨湘県属吏を発信者とする上行文書である。それゆえ県廷が受信した正本と考えられる。

竹簡「敢言之」文書はどうか。発信者を「君」として諱を示さないものは控えとみてよい。これに対して県令の諱を書くものや確認できないものの場合、正本として作成されたが発信されず県廷にとどめられた可能性は否定し

がたい。また督郵治所宛ての『伍』一八〇八（三九頁に前掲）は、『弑』六八二と同じく、受信後に県廷で保管した可能性がある。しかし、臨湘県廷を発信者とする以上、控えである蓋然性が高い。

また木両行では冒頭簡B面に①受信・開封記録欄があり、一部の③標題簡には別筆で開封日の書き込みがあるが、これらに相当する情報が確認できる竹簡はない。このことも、受信・開封しない場合に用いたという点で、竹簡は控えであるという想定を傍証する。

三、平行文書の発信者名の整理

五一簡の中で、木両行で他県県廷を発信者とする文書は三点確認できる。いずれも「叩頭移」の文言を用い、「移」の後で改行し「臨湘寫移」を二行目上端に配置する。⁽³⁷⁾

『弑』七五九、『捌』三五一五+三五一九、『捌』三五七二（いずれも四二頁に前掲）がこれである可能性は第二章でみたが、いずれも臨湘県廷を発信者とする。

次の二点は他県県廷を発信者とする「叩頭移」の文書であろう。

□羅長承□叩頭□（竹簡『肆』一六〇七4*1.3）

臨湘寫移今遣賊捕掾黃方 □（竹簡『捌』三一二九3*1.1）

『肆』一六〇七は羅県県廷を発信者とする。『捌』三一二九は、「臨湘寫移」の文言および上端に配する字配りが、木両行の「叩頭移」の文書の第二行と一致するため、他県県廷が発信者となって臨湘県廷に送った平行文書であると

考えられる。

四、下行文書の発信者名の整理

残簡が下行文書の断片であることを判断するための手がかりは、文言と発信者・受信者の名、それに書記者名である。

(1) 「某年某月某日某官……」

「某年某月某日某官」からはじまる下行文書の文言に「下」「告」「謂」がある。⁽³⁸⁾

「下」は一点のみで、木両行にも確認できない。

永元十六年 六月戊子朔 日 臨湘守令君守丞習下守左⁽³⁹⁾ (A)

掾 皓令史均綏常 (B) (竹簡『肆』一六八四23212)

以下は「告」または「告」「謂」の併用である。

永初二年正月戊辰朔 日 □□□□丞優告 ……東部勸農 (A)

掾成 令史昧兼史勤 (B) (竹簡『叁』八八七23214)

九月□□日□巳臨湘令□ 丞□告左□□□□ (竹簡『叁』一〇四九14013)

□□ 臨湘令君丞優告左尉□ (竹簡『叁』1111113512)

□□□優告佐(?)⁽⁴⁰⁾□□(竹簡『肆』一一〇₁63*13)

□□日甲戌臨 湘令君丞告守左尉謂北部 (A)

□ 兼掾常令史副兼史洳 (B) (竹簡『肆』一四五四₁5*14)

□□₁亥告守左尉(竹簡『陸』一二一八₂45*07)

五月七日庚辰臨湘令君 丞優告左尉□□□□□□□□□□(竹簡『柒』一九一一₁230*14)

正月□日□□臨湘令君丞優告 ……微泓 □亭長壽效功亭長(竹簡『捌』三三三三₁1224*14)

『肆』一六八四、『叁』一〇四九、『叁』一一三三、『肆』一四五四、『柒』二九二一、『捌』三三三三二は「臨湘令」「臨湘守令」とみえる。『叁』八八七(五〇頁に前掲)、『肆』一二〇六等の「優」と『陸』一二八八₂の「宮」は、すでにみた丞・守丞と同名である。これらは県令・県丞名義の県廷を発信者とする下行文書である。県令の諱を「君」に替えるのは第二章でみた控えと共通し、「朔」の後ろの日付を入れないものがある。

以下の二点は、受信者として尉・属吏がみえ、「告」「謂」を併用する⁽⁴¹⁾。

□□告守左尉謂東北部⁽⁴²⁾ 賊捕掾錯原游微戎(竹簡『伍』一八八二₁45*19)

□□丞告右尉謂□□□□□(竹簡『伍』一九八四₁02*13)

『伍』一八八二は発信者を欠き、『伍』一九八四は「丞」がみえるのみである。太守府や他県が臨湘県の県尉や属吏に直接「告」「謂」の文書を発信するとは考えがたく、これらも臨湘県廷を発信者と考えられる。

(2) 「某告」簡・「有教」簡

「某告」から始まり「有教」で結ぶ「記」とよばれる下行文書がある。⁽⁴³⁾五一簡では太守府発信の木牘『叁』一一四二・一一二四一、木牘『選』一一一(3291)、合檄『選』一一七(3285)があり、懸針を附した「府」からはじまり、文末は「有府君教」で結ぶが、「有」で改行し、「府君教」を行頭に配する。⁽⁴⁵⁾共通する文言をもつ竹簡をみてみよう。冒頭部分は以下である。

府 告 安民史竟民自言□(竹簡『壹』五七133*07)

府 告 北部賊捕掾碧游 微曠靡亭長固(竹簡『貳』七二五229*13)

□告臨湘……適出卒代郵行書□(竹簡『叁』八六一159*13)

府 告 □□效功亭長□坐……□(竹簡『叁』一〇四八188*16)

府 告 臨湘言部鄉有秩利 漢嗇□(竹簡『肆』一一六八181*2)

□府 告……□(竹簡『肆』一三八五98*13)

以下は文末である。

君教 臨湘丞印□(竹簡『貳』七一九135*12)

君教 臨湘…… 永初三年六月……起(竹簡『貳』七二七228*12)

府君教 …… □(竹簡『叁』一〇四六179*15)

府君教 不處□□ 永初元年正月十日起□(竹簡『捌』三三三122.3*15)

『貳』七一九、『貳』七二七は、「府君教」ではなく、「君教」とある。かつ「臨湘丞印」「臨湘……」とあり、臨湘県の印で封印したことを附記したと考えられるので、臨湘県廷を発信者とするわかる。『叁』一〇四六と『捌』三二三三は「府君教」とあり、「府告」の冒頭簡と同様に、太守府を発信者とする文書である。

(3) 有書記者名簡

ここでは書記者名が記載され、かつ「敢言之」が確認できない簡を整理しておこう。下行文書の他に、「敢言之」文書の断片や、平行文書の断片の可能性もある。⁽⁴⁶⁾

第四章(1)でみた「某年某月某日某官……」のうち、書記者名が記載された簡に、「掾 皓令史均綏常」(『肆』一六八四B)、「掾成 令史昧兼史勤」(『叁』八八七B)、「兼掾常令史副兼史湫」(『肆』一四五四B)があった。これらが県廷を発信者とすることは先にみた。書記者は姓を書かず、名のみである。

以下は県廷を発信者とするが、発信の文言が確認できない。

□□ 五日 □□臨湘令君丞□□佐□⁽⁴⁷⁾ (A)

□ 掾異令史 脩 (B) (竹簡『貳』五六七168*14)

□□臨湘 守令下雋左尉丞□□ (A)

□ 兼掾眞兼令史□□ (B) (竹簡『肆』一六九九88*15)

永初元年十月己亥朔十八日丙辰臨湘令□丞……□ (A)

五一広場東漢簡牘の公文書における竹簡の使用状況 飯田

……曹掾朱均令史□(B)(竹簡『伍』一七〇||20.2*14)

永初元年 六月 辛丑朔三日癸卯臨湘令 □□優□□(A)

掾□□令史遷兼史□□□(B)(竹簡『柒』一九一五19.9*1.5)

□□朔十日癸未臨 湘令君(?) 守丞左尉 (A)

□ 兼掾值兼令史蒼助史順 (B)(竹簡『柒』一九三八12.8*1.3)

永初三年 三月辛卯朔二日臨湘 令君守丞□□(A)

掾 雄令史俊 □(B)(竹簡『捌』二一十六||19.3*1.3)

□□□朔□日壬□臨 湘令君丞優□(A)

□ 宣令史止(?) 助史昭 □(B)(竹簡『捌』二二一十六||13.1.1)

これまでみた書記者名は、おおむね「敢言之」文書では姓名であった。それによれば『伍』一七〇三(前頁)は「敢言之」文書の可能性がある。

次の四点は、文言から文書の末尾簡と判断でき、書記者名が確認できる。

言會月十五日……律令兼掾……助史壽(?) 白(竹簡『貳』五六||23.1*1.3)

亟考實明證檢驗正處言會 月八日如府記律令 掾就□□(竹簡『叁』一〇五||18.4*1.4)

□□ 如府書律令 掾□令史□(竹簡『伍』一八四||41.3*1.5)

記律令 掾隗兼史脩助史詳(竹簡『捌』二二二||22.2*1.4)

『叁』一〇五二は「如府記律令」、『伍』一八四四は「如府書律令」とみえる。太守府が自ら発した文書の中で「如府書」「如府記」と称するとは考えにくい。他の官府が太守府の文書の中継転送する際の文書と考えられ、臨湘県廷を発信者とする可能性が高い。『捌』三二三・四の隗ら三名は君教木牘『壹』三三二に同じ官職名でみえ、臨湘県廷の掾史である。

このほかにも書記者名がみえる断簡があるが、発信者は特定できない。しかし、以下一二点は太守府を発信者とする文書である可能性は排除できる。

□□□之 (A)

□令史王□ (B) (竹簡『貳』五一八₃₄*1₅)

□…… □ (A)

掾受令史□ (B) (竹簡『貳』六四一₁₀₂*1₃)

(A)

掾若史詆助史植 (B) (竹簡『叁』八九六₁₃₈*1₅)

永元十五年閏正月丙寅朔……

□ (A)

兼掾圖(?) 玄兼史□□ (B) (竹簡『叁』一〇八四₁₀₅*1₂)

□兼掾董普令史這脩 (竹簡『叁』一一五₁₇₃*1₆)

□閏月乙未朔十□□ (A)

五一 広場東漢簡牘の公文書における竹簡の使用状況

飯田

二八九

- ☐ 掾由兼令史 ☒ (B) (竹簡『叁』一一八〇5*13)
☐ 兼掾唐就令史鄧 ☒ (竹簡『叁』一一八八2*14)
☐ 兼掾香令史脩副 (竹簡『肆』一三七四110*15)
☐ 月丙戌朔十一日 丙申臨…… 兼掾劉佑兼令史連陽 (竹簡『肆』一四九八205*13)
☐ ……告左尉 (A)
☐ 令史這脩 (B) (竹簡『伍』110八〇5*14)
☐ 習 (?) 守 (A)
☐ 則 (?) 令史責 (?) (B) (竹簡『陸』111九742*13)
☐ (A)
☐ 玄兼令史楊腴 (?) (B) (竹簡『陸』11四八180*13)
- 理由は以下である。太守府発信文書の書記者名は、木両行の『弐』五七六(掾珍・守屬覓・書佐條)と『弐』六七一(兼掾昆・守屬覓・書佐汜)では(兼)掾・守屬・書佐、合檄使用の「簡報」例五(③325-1140)(掾廣・卒史昆・書佐喜⁵⁰)では掾・卒史・書佐である。この構成は西北漢簡の府発信文書と一致し、掾と書佐が必ず入り、卒史・守屬が入ることはあるが、令史は入らない⁵¹。それに対して前記の一二点は(兼)掾と(兼)令史・(兼)史・助史で構成され、書佐と卒史・守屬はみえない。これは連道県廷発信文書『壹』三八四・『壹』三八七(掾慮・助史昆・助史)著)や、西北漢簡の県級発信文書、そしてこれまでみた臨湘県廷の文書と共通する。つまり、県級長官・次官を発信者とする

る文書は、書記者に書佐を含まない。このような特徴からすれば、『式』五一八以下の一二点は県級を発信者とする文書である。もちろんこの条件ではどの県が発したか判別できないが、可能性の点で臨湘県が最も高い。

同じ理由により、

☐如律令二月廿日☐……守屬横書佐☐（竹簡『捌』一二五一二・13・14）

は郡級官府を発信者とする文書であると考えられる。

五、臨湘県廷受信の竹簡

五一簡の竹簡の公文書は臨湘県廷を発信者とするものが著しく多い。しかしながら、文言から臨湘県廷が受信したと考えられる文書も存在する。これまでみたように「府告」有教」は太守府発信であるし、他県県廷を発信者とする文書もあった。このほかに以下の例を指摘することができる。

☐五月丁丑朔七日癸 未左尉☐兼東部賊捕 掾☐游徼甫☐叩頭（竹簡『肆』一二七〇・207・14）

上端を欠くが、「元号X年」が入れば一尺程度であり、文書の冒頭簡である。発信者は尉・賊捕掾・游徼で、「叩頭」の後、第二簡には「死罪敢言之」が続くと推測できる。県尉・県属吏を発信者、県廷を受信者とするのだろう。

次の簡はA面に日付と「泉陵」「丞」、B面に書記者名がみえるので、零陵郡泉陵県廷を発信者とする文書である可能性が高い。

☐……☐日己☐泉陵☐兼丞☐長☐（A）

□ 掾武守令史□ (B) (竹簡『柒』二八三188*14)

また次は「零(?) 陵印」と記され、零陵郡または零陵県を発信者とするようである。⁽⁵²⁾

如詔書律令零(?) 陵印元 興元年□ (竹簡『捌』三二六四93*13)

第二章で発信者名を知るために「叩頭」文言の主語をみたが、以下は臨湘県令・丞の諱と一致しない例である。

詳叩頭叩頭死罪死罪 □□書□□□ (竹簡『貳』六四〇(1)125*14)

必得□正處言不敢出 □月□日穢惶恐□ (竹簡『肆』一六一1151*15 + 1171106*13)

□□不去□□福松 職事無狀惶恐叩□ (竹簡『肆』一四九五130*11)

□ 配職事無狀惶恐叩頭死 罪□ (竹簡『肆』一五九195*09)

八月徒(?) 取代賞(?) 加(?) 所從得(?) 直 發日所在數刺言鄉 叩頭叩頭死罪死罪□□

(竹簡『肆』一六八五188*14)

□□綱叩頭 (竹簡『陸』1141132*10)

無人(?) 可采綱叩頭死罪死罪 □ (竹簡『柒』二七四19*12)

□躬承任叩頭死罪敢言之 (竹簡『捌』三二九九91*11)

□□ □烝□叩頭死罪敢 言之前部□□□□ (竹簡『捌』三三三1157*15)

□□姦詐言卿叩 頭□ (竹簡『捌』三六九九69*15)

彼らがまだ特定できていない県令・丞である可能性はあるが、これまでの検討方法によればこれらは県廷を発信者

とするとはいえない。

そして次の二簡は簡番号が連続し文脈が通じるので、同一の文書を構成し直接編綴されていたと考えられる。

欲殺閭□□物所犯無狀 書到考實姦詐丹 分別正處言會二月卅 (竹簡『叁』九五六三・四一三)

日無妄拘殺無罪犯 時禁如律令 (竹簡『叁』九五七三・四一三)

「書到」言「如律令」とあり、下行文書の末尾である。「分別正處言」するのは「丹」であり、臨湘県令と同名である。太守府が県令殷丹に下した命令の可能性がある。以上は、県廷を受信者とする文書であり、まずは正本であると考えねばならない。⁽⁵³⁾

ただし、県廷が受信し、その控えを作成した可能性は存在する。文書の中継転送する場合、中継機関は受信文書を書き写し転送する（「寫移」）。その場合、文書は受信文書の写し（Ⅰ）、中継機関が発信者となり「寫移」の文言を含む文書（Ⅱ）の二点からなる複合文書（Ⅰ）＋（Ⅱ）となる。⁽⁵⁴⁾ 正本が（Ⅰ）＋（Ⅱ）という構造であれば、それに対応する控えも（Ⅰ）＋（Ⅱ）という構造であろう。

作業効率からすれば、（Ⅰ）＋（Ⅱ）を作成するのに全てを新たに書き写すとは考え難い。（Ⅰ）は受信文書を控えに転写し、（Ⅱ）のみ新たに書き写すのではないか。それゆえ、県廷が（Ⅰ）の控えを作成する必要はないように思われる。

しかし、臨湘県廷は同一の報告を複数の宛先に発することがあった。

二月八日丙辰長沙大守兼中 部勸農督郵書掾育 有案問寫移

臨湘書到亟考實姦詐

明正處言府關副在所會月十五日毋妄拘毆（木両行『弑』六〇〇23.0*2.9）

これは郡屬吏である督郵發信―県廷受信の文書である。「言府關副在所」とあり、太守府に「言」（報告する。申し上げる。申請する）することと、「在所」（督郵治所）に「副」（副本）を「關」（報告する。上申⁵⁵）することを要求する。県廷は太守府と督郵治所に文書を發せねばならず、それぞれに控えが必要である。

中継転送の複合文書の控え（i）+（ii）の場合、一部は受信文書を控え（i）に転用すればよいが、複数に宛てて發する場合は、それに応じて（i）を用意せねばならず、県廷は県廷を受信者とする文書を新たに書写する必要がある。本章でみた竹簡はこれを含むのではないか。

おわりに

五一簡の竹簡公文書には臨湘県廷を發信者とするものが多くみられた。その中に未發信の正本や、發信―受信の後に県廷で保管した文書が存在する可能性は否定しがたいが、明確に控えの特徴をもつ簡もみられた。県廷を受信者とする文書も確認できるが、控えとして作成された可能性が想定できる。それに対して、県廷を發信者とする木両行は『弑』四三七と『弑』六八二の二点（四七・四八頁に前掲）にすぎない。

つまり、臨湘県廷を發信者とする文書は竹簡に偏っている。それゆえ五一簡の公文書において「控えを書写する場合、竹簡を使用することが優勢であり、正本用の簡との使い分けが存在した」と考えることができる。

この特徴は、竹簡を札に置き換えれば、西北漢簡の札と木両行の使い分けと共通するが、西北漢簡では両行を「草

稿」に用いた例、札の本文に両行の標題簡を附した例があることと比較すれば、五一簡の使い分けは徹底している。⁽⁵⁶⁾ また県令の諱を「君」に替えるもの、人名や日付が空白・別筆のもののように、正本とは明らかに異なる特徴を有するものもあるが、筆跡は謹直で編綴紐がかかる位置に空格を設けるなど、正本に共通する特徴もみられる。加えて平出のために改行し、「府」や「年」に懸針を附すものが確認できた。これは正本の字配りを反映するのではない。西北漢簡の「草稿」は筆跡が草卒で推敲の痕跡が認められる。⁽⁵⁷⁾ しかし、公開済みの五一簡の竹簡にこのような特徴をもつ簡は極めてまれであり、竹簡が推敲に用いた「下書き」としての「草稿」であるとは考え難い。「簡報」は書体を根拠に、五一簡の多くは官文書の正本で、「草稿」は少ないという認識を示していた。しかし、正本に對置されるのは下書きとしての「草稿」だけではない。臨湘県廷は、下書きとは別に、発信文書正本のコピーとして控えを書写した、あるいは正本そのままの筆跡・字配りの底本を控えとして保管したと考えられる。筆跡の謹直さは、そのみでは正本であるか否かを判別する基準として機能しない。

第一章で引用したように、「簡報」によれば、竹簡は厚さ〇・〇五〜〇・一二センチ、木両行は〇・三〜〇・六センチである。竹簡と木両行は、幅だけでなく、厚さも大きく異なる。収巻方法や収巻した状態・広げた状態の見た目、あるいは見栄え、重さや手に持った印象にも違いがあるだろう。⁽⁵⁹⁾ 簡の形状による格の違いは、西北漢簡よりも顕著である。

ただし、格の違い、正本用と控え用の使い分けは、竹と木という素材の違いによるとは言いきれない。なぜならば、わずかながら竹両行・竹牘に分類される簡が存在するためである。いずれも完形ではないが、公文書に特徴的

な文言を複数行、謹直な筆跡を用い書写したものである。⁽⁶⁰⁾つまり、竹材は木材と同じ形状に加工することがあり、本稿が「竹簡」とよんできた簡牘は竹材を使用した一行書きの「札」として、「竹札」と称するのが適切である。木にも竹にも、二行書き幅の両行と、一行書き幅の札があるならば、⁽⁶¹⁾格の違いは素材ではなく、幅と厚さにより差別化されたのではないか。⁽⁶²⁾竹木材を幅広く分厚く成形すれば格の高い両行であり、細く薄くすれば格の低い札となる。むろん竹も木も入手できるならば、細く薄く加工しやすい竹を札の、幅と厚みをとり成形しやすい木を両行の材として好むだろう。⁽⁶³⁾

このように考えると、軽便な札は県廷内部の「うちづかい」用であるのに対し、重厚な両行は外部に送るためのフォーマルな「よそゆき」用という使い分けを想定することができる。太守府や他県に送る文書に「うちづかい」用の札を積極的に使用することはないだろう。一方、移動と保管の便を思えば、耐久性を確保できるかぎり、軽く薄い方がよく、調達にも経済的である。しかし便宜や経済性を犠牲にしても、「よそゆき」には重厚な両行を使用した。

角谷常子は、前漢後半期から後漢初期の居延漢簡と比較して、里耶秦簡の簡牘の大きさの多様性に、文書制度における秩序づけの未整備をみている。⁽⁶⁴⁾高村武幸によれば、敦煌では細い木材を有稜化し両行であることを強調し、居延でも外地から木材を購入していた可能性がある。⁽⁶⁵⁾前漢後半期以降、官府は手間や経費をかけ、格にふさわしい簡牘を調達・選択したようであり、簡牘の形状には独特の秩序が存在した。後漢中期の五一簡もこの秩序のもとにある。紙の普及後も行政の場では簡牘が長く主流であり続けたが、⁽⁶⁶⁾書写材料の形状による秩序の中に、新参の紙を

位置づけるのは容易でなかったのではないか。

五一簡は臨湘県廷を受信者とする木両行の公文書も多く含むため、県廷では受信した正本と、発信文書の控えを一括して管理したと考えられる。一方で、下書きなく文書が作成されたとは考えがたい。にもかかわらず、本資料群が下書きを含まないとしたら、正本と控えからなる保管文書群は、下書きとは区別され管理されたと考えられる。文書の作成と管理体制、及び文書作成にいたる意思決定のあり方を検討する必要がある。

註

(1) 「五一簡」と略称する。長沙市文物考古研究所「湖南長沙五一広場東漢簡牘發掘簡報」(『文物』二〇一三・六)、同

等編『長沙五一広場東漢簡牘選釈』(二〇一五年)、『長沙五一広場東漢簡牘』卷・貳(二〇一八年)、叁・肆(二〇一九年)、伍・陸(二〇二〇年)、柒・捌(二〇二三年、いずれも中西書局)。それぞれ「簡報」「選」「卷」「捌」と略す。本稿では「竹簡『肆』一二六四26*13」のように、

「形状」「略称」「整理序号」および「簡牘番号及尺寸対照表」記載の長さ・幅を附すが、センチは略す。「簡報」「選」掲載簡は原始出土編号を併記する。釈文・形状は写真図版に基づき一部改めた。字配りではできるだけ反映し、釈読しえない文字は□で、字数を確定しえないものは……で、断

簡は□で、懸針(後掲の註(44)参照)が附された文字はゴシック体で、別筆は斜体で示す。読解を目的としないので、日本語訳は掲載しない。

(2) 角谷常子「簡牘の形状における意味」(富谷至編『辺境出土木簡の研究』朋友書店、二〇〇三年)。

(3) 公文書の正本ではないバージョンは、草稿や副本、底本など多様である。邢義田「漢代簡牘公文書の正本、副本、草稿和簽署問題」(『今塵集——秦漢時代の簡牘・画像与文化流播——』(上) 中西書局、二〇一九年)。本稿では、ひとまず発信者のもとに意図的に留められたバージョンとして控えの語を用いる。先行研究の用いた語を引用する場合は、「」によって示す。

(4) 富谷至「二世紀の秦漢史研究——簡牘資料——」(『岩

波講座世界歴史3 中華の形成と東方世界」岩波書店、一九七八年。

- (5) 榎山明「紙の普及についての試論——蔡倫造紙記事と出土簡牘史料——」『明大アジア史論集』二八、二〇二四年。

- (6) 年代は『沓』前言を参照。県廷の廃棄文書であることは、陳偉「五一広場東漢簡牘属性芻議」(簡帛網 <http://www.bsm.org.cn/2013-09-24>) 参照。

- (7) 筆者の整理では、綴合済のものを一点と数えて、公開数三六一二点、そのうち、竹簡は二四九三点、木両行は六六〇点である。

- (8) 木両行を中心とする文書復元研究に、楊小亮『五一広場東漢簡牘冊書復原研究』(中西書局、二〇二二年)がある。研究動向は呉方浪「長沙五一広場出土東漢簡牘研究綜述」『簡帛研究二〇二二秋冬』(広西師範大学出版社、二〇二二年) 参照。

- (9) 楊小亮『五一広場東漢簡牘冊書復原研究』二〇九頁。

- (10) 綴合簡の正確な大きさは不明である。綴合簡を除き、竹簡は二四五一点あり、長さ一〇センチ以下が一四四三点、二〇センチ以上は二三六点である。木両行は五四六點、一〇センチ以下は三二点、二〇センチ以上は四五四点である。

- (11) 各簡の厚さは公開されていない。なお邢義田「漢代簡牘の体積、重量和使用——以中研院史語所藏居延漢簡為例——」(『地不愛宝——漢代的簡牘——』中華書局、二〇一一年)のサンプルデータによれば、居延旧簡の木簡の厚さの平均は〇・三四六センチ、竹簡は〇・二一一センチである。長沙出土竹簡では、走馬樓西漢簡は厚さ〇・一〇・三三センチ(「長沙市走馬樓西漢古井及簡牘發掘簡報」『考古』二〇二一年三)、走馬樓呉簡は〇・一五〇・一八センチと、〇・〇五〇・一センチのものがある(「長沙走馬樓」に発掘簡報)『文物』一九九一五)。

- (12) 高村武幸「長沙五一広場後漢簡牘の概観」(伊藤敏雄等編『後漢・魏晉簡牘の世界』汲古書院、二〇二〇年)、鷹取裕司「長沙五一広場東漢簡牘・君教文書新考」(『東西人文』一五、二〇二一年)。

- (13) 五一広場東漢簡牘研究会(飯田祥子・章瀟逸・角谷常子・藤本航輔・鷺尾祐子)「長沙五一広場東漢簡牘訳注稿 第一層 上」(『立命館文学』六八七号、二〇二四年)「解題」参照。

- (14) 高村武幸「中国古代簡牘の分類について」(『秦漢簡牘史料研究』汲古書院、二〇一五年)。

- (15) 飯田祥子「五一広場東漢簡牘の上行文書に関する基礎

的整理」(『漢字文化研究』一二、二〇二二年)、章瀟逸「後漢中期官文書簡の基礎的研究——長沙五一広場東漢簡牘を中心に——」(京都大学大学院人間・環境学研究科『歴史文化社会論講座紀要』一九、二〇二二年)。

(16) 青木俊介「候官における簿籍の保存と廃棄——A%遺址文書庫・事務区画出土簡牘の状況を手がかりに——」(榎山明等編『文献と遺物の境界——中国出土簡牘史料の生態的研究——』六一書房、二〇二一年)の整理を参考にした。

(17) 郡属吏発信—県廷受信文書に「有案間移」、県廷発信—郡属吏受信文書に「敢言之」の文言が確認できる。章瀟逸「後漢中期官文書簡の基礎的研究」参照。

(18) Tsuchiguchi Fuminori, “A Preliminary Study of “Other Post Slips” from Liye Site J1”, *Bamboo and Silk*, 5(1), 2022.

(19) 前掲飯田祥子「五一広場東漢簡牘の上行文書に関する基礎的整理」。

(20) 李均明「書檄類の書体特徴(五) 稿本」(『秦漢簡牘文書分類輯解』文物出版社、二〇〇九年)。

(21) 「□□令殷丹守左尉」(竹簡『陸』二三六二)、「臨湘令殷君門下 郎中隋宣叩頭白記」(封檢『沔』二九五)。

(22) 綴合は董嶺華「五一広場東漢簡牘(伍)綴合一則」(簡帛網<http://www.bsm.org.cn/2023-09-27>)による。なお、整理

者以外の研究者による綴合の場合には、綴合後の整理序号の表示において、『長沙五一広場東漢簡牘』の巻数を省略せず示している。

(23) 前掲李均明「秦漢簡牘文書分類輯解」。

(24) 「竹簡白文書」は、前掲鷹取裕司「長沙五一広場東漢簡牘・君教文書新考」参照。

(25) 「夏況亡之丹舍」「問丹」(竹簡『式』六三二)の「丹」は県令とは別人であろう。

(26) 前掲飯田祥子「五一広場東漢簡牘の上行文書に関する基礎的整理」。

(27) 「□死罪白中部督郵」(竹簡『式』七二二三・四一三)は叩頭死罪白文書であろう。

(28) 飯田祥子「五一広場東漢簡牘③:200-2' ③:200-5' 平行文書冊書復元、及び関連簡に関する覚書」(『五一広場東漢簡牘研究会』ホームページ内に掲載、二〇二一年二月二五日

<https://gojinokai.jindofree.com/>)、前掲章瀟逸「後漢中期官文書簡の基礎的研究」。

(29) 綴合は謝明宏「《長沙五一広場東漢簡牘》綴合(一)」(簡帛網<http://www.bsm.org.cn/2022-11-13>)による。

(30) 「臨湘□醴陵不□□」(竹簡『沔』一七九五・二〇七)、「臨(?)湘(?)言(?)司寇張□等□□」(竹簡『柒』

二八三五⁸¹3)も同一書式の可能性がある。

- (31) 『式』五〇〇、『肆』一二七八のように「書」は書かず、「解」で結ぶものもある。

- (32) 他に「税官」〔伍〕一八五六+一八七八、「南郷」〔選〕八八 (③325-17) 等。

- (33) その場合、「竹簡白文書」が想定できる。「竹簡白文書」は長官の承認を得て「君教木牘」に書き換えられるとされる(前掲鷹取裕司「長沙五一広場東漢簡牘・君教文書新考」)。「君教木牘」〔式〕五〇三等では史が「某亭長某言」を引用する。

- (34) 大庭脩「文書簡の署名と副署試論」〔漢簡研究〕同朋舎出版、一九九二年。

- (35) 木両行の他県からの平行文書『壹』三八四・『壹』三八七、太守府からの下行文書『式』五七六、『式』六七二に同様の記載があり、『壹』二〇八、『陸』二五〇二、『柒』四九七九+四九八〇+四四二八+三〇八七もその可能性がある。また太守府発信下行文書の合檄「簡報」例五 (③325-140)、発信者不明の竹牘『捌』三二八四にも同様の記載がみえる。

- (36) 嚴耕望『中国地方行政制度史甲部秦漢地方行政制度』(中央研究院歷史語言研究所、一九九〇年三版)、榎山明「長

沙東牌樓出土木牘と後漢後半期の訴訟」(『秦漢出土文字史料の研究』創文社、二〇一五年)。ただし郡属史が県廷で文書を保管するのは不自然か。

- (37) 『壹』三八四・『壹』三八七、『式』四〇七、『選』一〇〇 (③325-129)。前掲飯田祥子「五一広場東漢簡牘③200-2、③200-5平行文書冊書復元、及び関連簡に関する覚書」。

- (38) 前掲章瀟逸「後漢中期官文書簡の基礎的研究」。

- (39) 整理者は「守佐」と釈読していた。図版により改めた。

- (40) 「優告佐(?)」の「佐」は「左」ではないか。

- (41) □□左尉謂左」(竹簡『柒』二九八四424) もその断片であると考えられる。

- (42) 整理者は「東北部」を「東部(?)」と釈読していた。章瀟逸「漢代賊捕掾考」(京都大学大学院人間・環境学研究所「歴史文化社会論講座紀要」二〇、二〇一三年)により改めた。

- (43) 鷹取祐司「漢代官文書の種別と書式」(『秦漢官文書の基礎的研究』汲古書院、二〇一五年)。

- (44) 懸針は、特定の筆画を長く太く伸ばす運筆で、公文書の威信・威圧の視覚的效果を期待して用いられるとされる。富谷至「書体・書法・書芸術——行政文書が生み出した書芸術」(『文書行政の漢帝国——木簡・竹簡の時代』名古屋

大学出版会、二〇一〇年）参照。

- (45) 「左尉告東部賊捕」(竹簡『肆』一二四四五⁷*1.3)は県尉が属吏に「告」したと解し得る。あるいは「☐部左尉告郷(?) 嚴賊捕」(竹簡『陸』一二四二七8⁷*1.3)のような文書の途中か。

- (46) 『肆』一四三三五、『肆』一五二一〇、『肆』一五四五、『伍』一九六七、『陸』二二七二、『柒』二六六〇、『柒』二七六九、『柒』二七七〇、『柒』二八一〇にも、日付と「臨湘」「君」等が確認でき、臨湘県廷を発信者とする公文書の断片である。

- (47) 「☐佐☐」の「佐」は「左」ではないか。

- (48) 「曹掾」は文例からすれば「兼掾」ではないか。

- (49) 太守府が他郡の文書の中継転送する場合、「如某郡府書」とする。「如前會日、南郡府書・律令」(『弍』五七六)。

- (50) 「簡報」は「熹」とする。図版により改める。

- (51) 前掲大庭脩「文書簡の署名と副署試験」、仲山茂「漢代の掾史」(『史林』八一―四、一九九八年)。書佐が郡級にのみみえることは、角谷常子氏の「ご」教示による。

- (52) ただし県であれば「零陵令印」「零陵丞印」、郡であれば「零陵太守印」「零陵太守丞印」と記載すると考えられ、「零陵印」は不可解である。

五一 広場東漢簡牘の公文書における竹簡の使用状況

飯田

- (53) 他に督郵史を発信者とする「敢言之」文書がある。「☐部督郵書史成 叩頭死罪敢言之」(竹簡『捌』三六一五¹²*1.1)。管見の限り、県の督郵は確認されておらず、郡吏であると考えられる。それゆえ督郵史が直接県廷に発した文書であるとは考え難い。

- (54) 連道県廷受信上行文書Ⅰ(『壹』八一)と連道県廷発信平行文書Ⅱ(『壹』三八四・『壹』三八七)からなる複合文書がある。前掲飯田祥子「五一広場東漢簡牘」③200²、③200³平行文書冊書復元、及び関連簡に関する覚書」、楊小亮「連道写移奇郷受占臨湘南郷民逢定書」(前掲『五一広場東漢簡牘冊書復元研究』) 参照。

- (55) いずれも京都大学人文科学研究所簡牘研究班「漢簡語彙」(岩波書店、二〇一五年)。

- (56) 両行の「草稿」は前掲角谷常子「簡牘の形状における意味」参照。居延漢簡「駒罷勞病死冊書」の標題簡EPF2.186は木両行であるが、本文簡は札である。

- (57) 前掲李均明「秦漢簡牘文書分類輯解」。

- (58) 竹簡『柒』二九三八の按語は日付の干支「癸未」の下に墨跡があることを指摘する。いわば「二重書き」であろうか。

- (59) 木両行は折本状に収巻したと考えられる。前掲飯田祥

子「五一広場東漢簡牘の上行文書に関する基礎的整理」参照。一方、札の冊書を折本状に収卷するのは据わりが悪く、卷子本状に巻き込むのが自然である。

- (60) 『肆』一五〇一、『肆』一五八七、『捌』三一九四等。また謝明宏『長沙五一広場東漢簡牘』綴合(一)。(簡帛網 <http://www.bsm.org.cn/2022-11-07>)は『式』七九九等を綴合し約27.8*3.8の竹牘を復元する。この竹牘は、文言の一部と形状・字配りの特徴が木牘『壹』四34.1*3.0と共通する。
- (61) なお公文書に木札はきわめて少なく、『壹』二九六12.0*1.6等一〇点程度である。

- (62) 岳麓「秦律令(伍)」一一二一一二二(陳松長主編『岳麓書院藏秦簡(伍)』上海辭書出版社、二〇一七年)によれば、秦においては簡牘の幅と厚さに規定があった。

- (63) 竹簡の製作方法は、金平(石原遼平訳)「竹簡の製作と使用——長沙走馬樓三国呉簡の整理作業で得た知見から——」(窪添慶文編『魏晋南北朝史のいま』勉誠出版、二〇一七年)が参考になる。

- (64) 角谷常子「木簡使用の変遷と意味」(『東アジア木簡学

のために』汲古書院、二〇一四年)。

- (65) 高村武幸「地域・官署による簡牘形状の違い——敦煌漢簡「両行」簡を中心に——」(『東洋学報』一〇四三、二〇二二年)。

- (66) 前掲榎山明「紙の普及についての試論」。

【附記】本稿はJSPS科研費19K01027の助成をうけたものである。五一簡の読解は五一広場東漢簡牘研究会の成果である。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「中国古代簡牘の横断領域的研究(46)」の支援をうけ、研究会での報告において参加者から助言を得た。

なお、本稿脱稿後、廣瀬薫雄「長沙五一広場東漢簡牘」張雄等不以徵逮為意不承用詔書案、竹簡文書試析」(『法律史評』一一、二〇二三年)を得た。五一簡の正本と草稿に関わる議論をふくむ。あわせて参照されたい。

(古代学協会客員研究員)

to the local Chinese were primarily secured by imported Asian goods such as Japanese cotton cloth or sundry items. The import volume of Asian goods surged after the First World War due to disrupted European shipping routes in the Netherlands East Indies. Inexpensive goods from Japan, accepted as substitutes by Europeans, penetrated local markets. At the same time, the Java Bank relied on the Be Biau Tjoan Bank, with its knowledge of the credit conditions of local Chinese, to serve as an intermediate financial function with Chinese merchants. Because financial connections between European banks and Chinese businesses were disrupted after the 1917 Sugar Crisis, this collaboration became critical as part of efforts to prevent speculation by local merchants.

The collapse of the Be Biau Tjoan Bank in 1927 marked the end of its intermediary role. European trading companies subsequently assumed direct responsibility for financing Chinese merchants, who continued to dominate local distribution. However, capital investments by the Be Biau Tjoan Bank in the early 1920s helped solidify the presence of Japanese products in the local market.

The Use of Bamboo Slips in the Official Documents of the Eastern Han Wooden and Bamboo Slips from Wuyi Square

IIDA Sachiko

The Eastern Han Wooden and Bamboo Slips from Wuyi Square in the Middle Eastern Han Dynasty are a collection of discarded documents from the county court of Linxiang 臨湘, Changsha 長沙 commandery. The Middle Eastern Han Dynasty was the period of the emergence of paper as a material for writing, and was the final period when people mainly used bamboo and wooden slips for writing. Understanding how wood and bamboo were used differently in these documents is not only indispensable for reading the collec-

tion, but also provides a meaningful perspective for understanding the documents after the emergence of paper.

In the field of document administration, in addition to the original document that is sent out, a copy of the original document that remains with the sender was necessary to create. This paper assumes that the bamboo slips were predominantly used for transcribing copies of the original documents, and examines the originators of documents to prove it. The documents with the name of the county court as the originator probably correspond to such copies. Based on the format of official documents, the names of senders, subjects, and scribes for ascending indicate that most of the bamboo documents sent for higher, lower, and similar authorities originated from the county court.

Although documents received by the county court also exist in these bamboo slips, there is also the possibility these documents are copies. This is because the county court sometimes relayed received documents to multiple locations and, in such cases, the county court needed to create a copy of the received documents.

As a result, it seems that bamboo slips were used for making copies, and wooden *mulianghang* 木兩行 were used for the authenticated original documents. The bamboo slips are thinner and narrower than *mulianghang*. There is a significant visual and sensory difference between them to indicate a clear grade of materials. However, it is also possible that the difference was not only based on the materials but on the shapes: one-line for *zha* 札 and two-line for *mulianghang*. The light and useful *zha* were used internally, while the heavy, formal, and impressive *mulianghang* were used externally. There was an order of different grades for letter-copying materials indicated by their shape and the materials were selected according to the importance of the documents.